

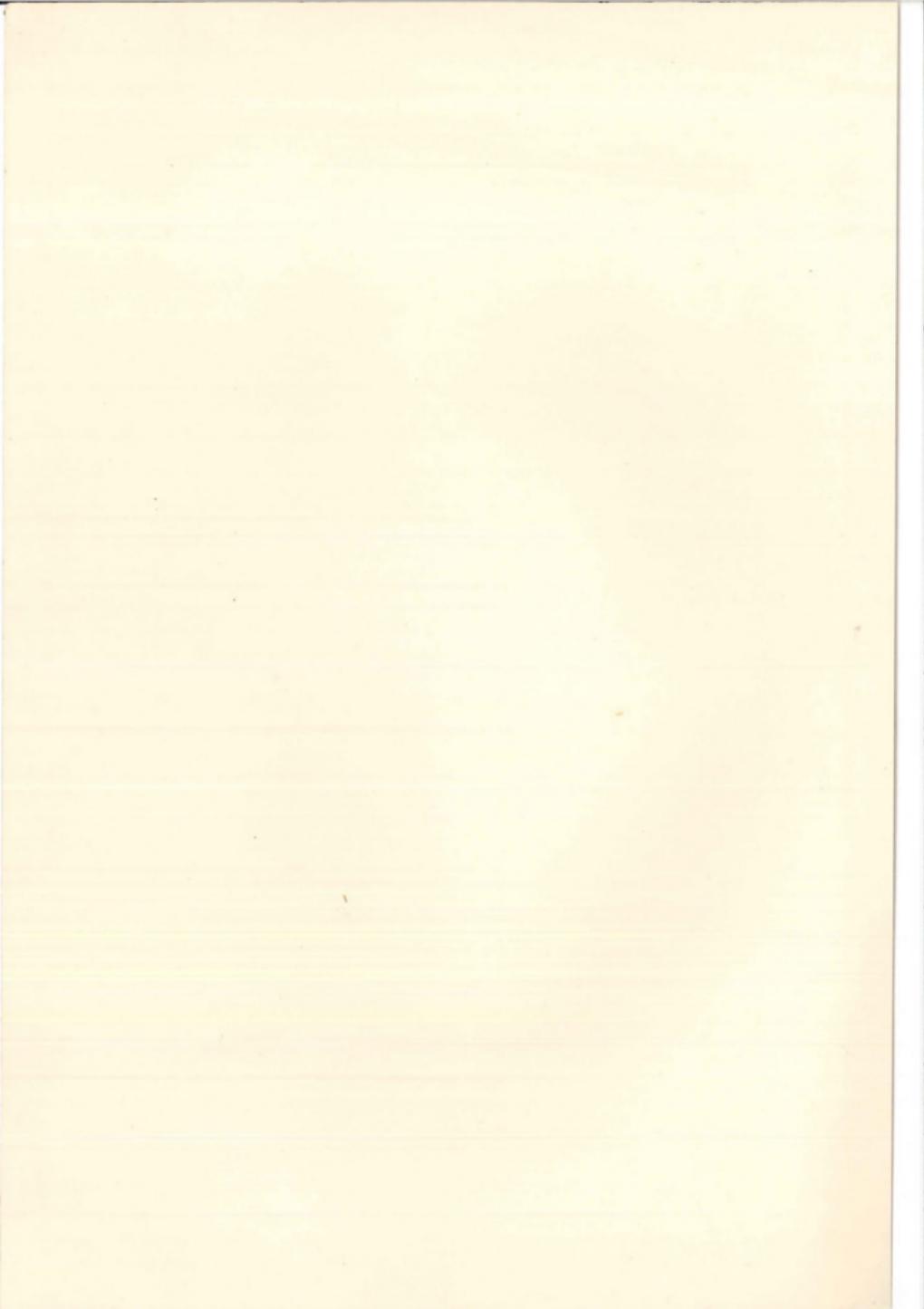
沖縄県文化財調査報告書第40集

古座間味貝塚

第1次範囲確認調査概報

1981年3月

沖縄県教育委員会



目 次

本文目次

はじめに	1
I 貝塚の位置と環境	3
II 調査の概要	5
1. 層序	5
(1) A-105 グリッド	5
(2) ケー 97 グリッド	7
2. 遺構	9
(1) 第1号住居址	9
(2) 第2号住居址	9
3. 出土遺物	12
(1) 貝製品	12
(2) 骨製品	14
(3) 石器	14
(4) 土器	21
III むすび	28

挿図目次

第1図 座間味島の位置図及び遺跡分布図	2
第2図 古座間味貝塚一帯の地籍(地割遺構)図及びグリッド設定図	4
第3図 土層壁面図	8
第4図 第1号住居址平面図・断面図及びゴホウラ留り平面図・断面見通し図	10
第5図 第2号住居址平面図・断面見通し図	11
第6図 貝製品実測図	16
第7図 貝輪実測図	17
第8図 有孔ゴホウラ及び骨製品実測図	18
第9図 石斧実測図	19
第10図 石斧及び黒曜石剥片実測図	20
第11図 土器実測図	25
第12図 土器実測図	26
第13図 土器実測図	27

図版目次

図版1	古座間味貝塚遠景	29
図版2	発掘状況	30
図版3	上：A-105グリッド東壁、下：ケ-97グリッド南壁	31
図版4	第1号住居址	32
図版5	第2号住居址	33
図版6	上：ゴホウラ出土状況、下：土器出土状況	34
図版7	上：現地説明会、下：発掘調査メンバー	35
図版8	貝製品及び骨製品	36
図版9	貝 輪	37
図版10	有孔ゴホウラ	38
図版11	石 斧	39
図版12	石 斧	40
図版13	土 器	41
図版14	土 器	42

はじめに

沖縄本島南部の西方海上に浮ぶ風光明媚な慶良間列島、なかでも海岸線の美しい座間味島には、現在7ヶ所の先史・原史遺跡が確認されている。これらの遺跡はすべて海岸砂丘地に立地している。座間味島を主島とする座間味村は耕地に乏しく、今後の農業推進の一環として海岸砂丘地の土地改良事業を策定している。この策定区域内には前記の埋蔵文化財がほとんど含まれ、その保存が懸念される。

今回は土地改良事業に先立ち、7遺跡の中で最も古い時代のものとみられている古座間味貝塚の範囲確認を目的とした発掘調査を、昭和55年8月4日から同年9月15日まで実施した。調査は次項でも記しているように多大な成果を収めることができた。また、貝塚の範囲も予想以上に広がっており、当初の目的を達成することができず、次年度もひきつづき範囲確認調査を実施する予定である。今後は、私たちの祖先の残した貴重な文化遺産を、子孫へ継承していくうえでも、できる限りの保存策を講じていく所存である。

調査に際して、多大なる御協力と御理解を賜った座間味村長の田中登氏、ならびに座間味村教育委員会教育長の宮里哲夫氏、主事の中村民子さん、宮平善孝氏、宮平勝氏、地主の方々、さらに、発掘調査はもとより資料整理、概報作成にあたって援助をいただいた沖縄国際大学考古学研究室の高宮廣衛教授をはじめ、O. B. の玉城朝健氏、下地安広氏、学生諸氏に対し、感謝の意を表する次第である。

なお、調査体制は次のとおりである。

調査主体	沖縄県教育委員会
調査責任者	前田 功（沖縄県教育委員会教育長）
調査指導	高宮 廣衛（沖縄国際大学文学部教授）
調査担当者	金 武 正 紀（沖縄県教育庁文化課主任専門員）
	岸 本 義 彦（沖縄県教育庁文化課専門員）
調査補助員	玉城 朝 健（沖縄国際大学考古学研究室O. B.）
	下地 安 広（沖縄国際大学考古学研究室O. B.）
調査参加者	沖縄国際大学考古学研究室 松川 章、大城 剛、屋比久孟次、阿波根徹（以上3年次） 島 弘、吳我春定、金城勝也、桃原隆信、上地千賀子（以上2年次） 薬師川冬樹、真栄城マリ子（以上1年次） 佐和田勝美（沖縄国際大学考古学研究会）
調査協力者	田 中 登（座間味村長） 宮 里 哲 夫（座間味村教育委員会教育長） 中 村 民 子（座間味村教育委員会） 宮 平 善 孝（座間味村教育委員会） 宮 平 勝（座間味村教育委員会）



第1図 座間味島の位置図及び遺跡分布図

I 貝塚の位置と環境

古座間味貝塚は、沖縄本島南部の西方海上に浮ぶ慶良間列島の座間味島にある。

座間味島は慶良間列島の中で渡嘉敷島の次に大きく、座間味村では主島になっている。島の面積は約 8.5 km²、周囲 16.8 km の比較的小さな島で、地形は起伏に富み海岸まで迫る山々は中岳（167 m）を頂点とする 100 m 級の山々で島を形造っている。山は島の北側よりあり、その海岸は絶壁になっている。そのため、部落は島の南側内湾部に形成されたわずかな沖積平野にある。また、座間味島の 7 遺跡（真喜屋武原遺物散布地・大浜遺物散布地・阿佐遺物散布地・大和馬遺物散布地・古座間味貝塚・座間味貝塚・阿真遺物散布地）も、現在の部落と同様に島の南側の沖積平野に分布している。島の地質は古生層の粘板岩、千枚岩が基盤をなし、その風化土と海浜砂丘からなっている。

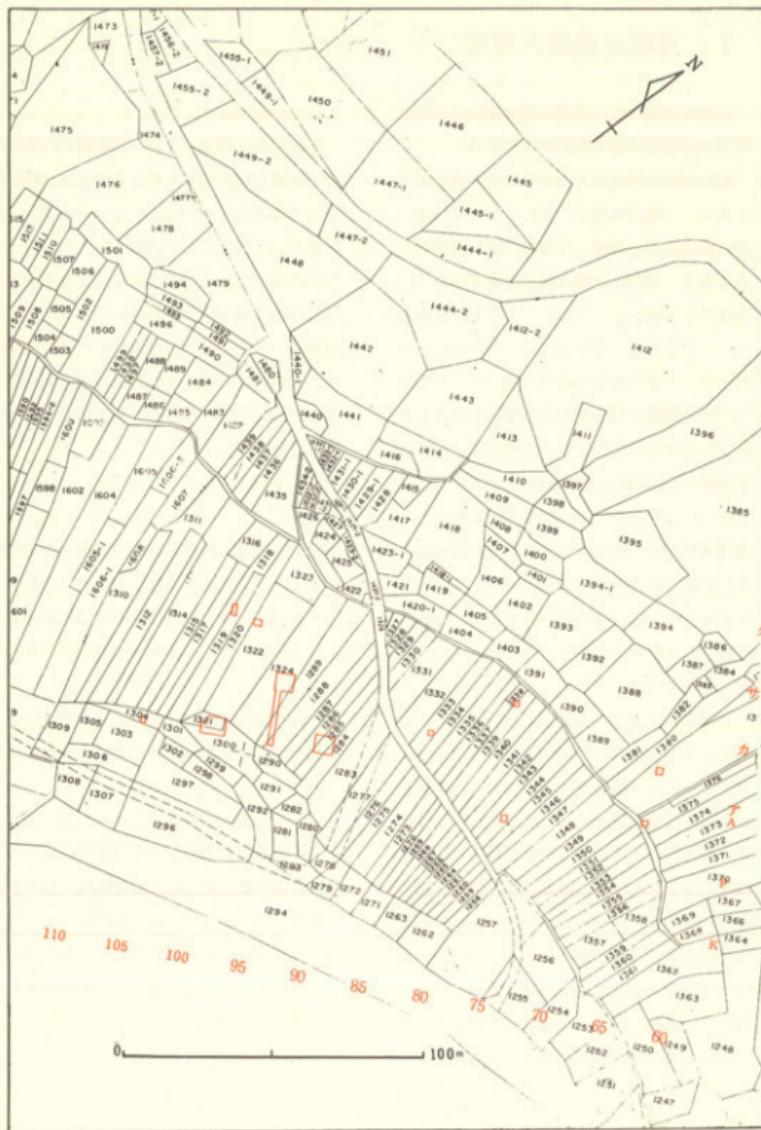
古座間味貝塚は、座間味部落より東方約 550 m 離れた通称古座間味原及び牧治原に所在する。付近一帯は標高 4 ~ 5 m の海浜砂丘で、砂丘は東西約 600 m、南方約 150 m の孤状を呈し、それに沿ったかたちで、背後に湿地帯をひかえている。眼前（南側）に広がる海は、海岸から 15 m も行かないうちに 2 m 前後の深さになる。伝承によると、以前、古座間味原に人々が住んでいた頃、前面の海で子供がよく溺れ、時に命を奪われる者もでたことから、海の浅い現在の座間味部落に移った

ということである。

本貝塚は、今までに新田重清氏（註 1）、沖大文協（註 2）沖国大考古学研究会（註 3）、沖国大考古学研究会 O. B. 会の知名定順氏、他 3 名（註 4）などにより調査が行なわれ報告されている。これらの調査によって沖縄新石器時代の前 IV 期（高宮編年、註 5）～グスク時代の遺物と後期に属すると思われる人骨が採集されている。しかし、いずれも表面踏査を主体としたもので、本格的な発掘調査は今回が初めてである。

（註）

1. 新田重清「慶良間諸島の遺跡分布について」『沖縄文化財調査報告』1961 年
2. 沖縄学生文化協会「座間味島・阿嘉島の先史遺跡概要」『郷土』第 8 号 1970 年 2 月
3. 沖縄国際大学考古学研究会「座間味島調査報告」『第 4 回大学祭研究発表』1975 年 11 月
4. 知名定順・花城潤子・盛本 獣・阿利直治「座間味村古座間味原出土の人骨について」『花様』創刊号 沖縄国際大学考古学研究会 O. B. 会 1979 年 12 月
5. 高宮廣衛「沖縄諸島における新石器時代の編年について（試案）」『南島考古』第 6 号 1978 年 12 月



第2図 古座間味貝塚一帯の地籍(地割遺構)図及びグリッド設定図

II 調査の概要

今回の調査により多くの成果が得られたが、それらの詳細は次年度の本報告に委ね、ここでは、その一部について報告する。その際、遺跡の時期や土器編年については、第1表に示してある高宮廣衛氏の編年（「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）『南島考古』第6号 1978. 12」）を用いた。

1. 層序

層序は発掘地区により、後期と前IV期相当の層序が認められた。前者は発掘地区では海側の地区、A-105グリッド、A-A-99・100グリッド、A-A-90・91グリッドで、後者は山側の地区ケ-97グリッド、エ・オ-94・95グリッドで確認された。

ここでは、比較的層序の安定しているA-105グリッドとケ-97グリッドについて簡単に述べ、その他のものについては後日報告する。

(1) A-105グリッド

層序は、8枚の層からなり、第5層（黒褐色混疊砂層）を除いては全面に広がっている。全体的に北から南へゆるやかな傾斜を示している。本グリッドでは、A-99・100グリッドで認められた第2層（黒褐色混疊砂層）が欠落している。以下、各層の特徴について簡記する。

《第1層》

表土攪乱層で、発掘区全面にみられる。灰褐色の混疊砂層で、本グリッドでは30～40cmの厚さをなし、北から南へゆるやかに傾斜している。同層からは、土器などの先史遺物と共にガラス片などの後代遺物も出土している。

《第2層》

黒褐色混疊砂層で、A-A-99・100グリッドで認められた層である。本グリッドでは欠落している。

《第3層》

黄褐色の混疊砂層で、グリッド全面に広がっている。厚さは35～45cmで、北から南へ傾斜し、南壁側で最も厚い。人工遺物は検出されなかった。

《第4層》

灰褐色の砂層で、グリッド全面に広がっている。本層は、北から南へ急激に傾斜し、北側で厚く（21cm前後）、南側では極端に薄い（5～7cm前後）。また、北壁側では、第4層が第6層と接している。同層は、上部でサンゴ蹠を混入しているが、下部では木炭や千枚岩（径2～5cmの小片）を多量に混じる層である。しかし、深くなるにしたがって千枚岩は減少する傾向にある。チョウセンザザエの殻が北側隅で集中的に見られ、人工遺物としては貝製品や後期系土器などが出土している。

《第5層》

黒褐色の混疊砂層で、南西隅で最も厚く、北壁と西壁側に延びるにつれ薄くなり、北壁と西壁には及んでいない。後期系の厚手土器が出土している。

《第6層》

黄褐色の混疊砂層で、北側から南側へゆるやかな傾斜を示している。前述したように第5層が北壁に達していないため、同層は東北隅では第4層と接している。そこからは貝輪や焼成の良い片面の剥落した土器などが出土している。

時期区分		土 器 型 式	沖縄諸島発見の 縄文・弥生式土器	その他の年代資料
前 期	I	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670 ± 140 y. B. P. 東原式 6450 ± 140 y. B. P.
	II	曾畠式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畠式土器 条痕文土器	曾畠式(渡具知東原) 4880 ± 130 y. B. P.
	III	?		
	IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3370 ± 80 y. B. P. 伊波式(室川) 3600 ± 90 y. B. P.
	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる
後 期	I	?	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器	
	II	具志原式土器	山ノ口式土器	
	III	アカジャングー式土器		アカジャングー式は成 川式並行とみられる
	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器

第1表 沖縄諸島の編年(試案) 1978年高宮作成

《第7層》

灰褐色砂層と黄褐色混疊砂層が入り混ってマダラ状を呈する層で、グリッド全面にみられる。遺物も僅かながら出土することから、地山への移行層と考えられる。

《第8層》

黄褐色混疊砂層で、サンゴ礁が多く含む層と細かい砂の層が互層を成している。上部より土器が2~3片得られたが、第7層からの落ち込みと思われる。地表下約3mまで掘り下げたが、変った状況はなく、地山であろう。

(2) ケー97グリッド

ケー97グリッドは、今回の発掘区では最も北側に位置するものである。層序は、6枚の層からなり、オリジナルな文化層は第3層と第5層の2枚である。第3層では柱穴らしき落ち込みが検出されたが、詳細は不明である。第3層および第5層からは奄美系の土器も出土した。以下、各層について略述する。

《第1層》

いわゆる表土（灰褐色混疊砂層）で、遺跡全面に分布する耕作土である。層の厚さは25~45cmで、南東側で最も厚い。同層は先史土器（後期系）やシャコ貝、夜光貝等の海産貝と共に後代のガラス片や鉄片なども含んでいる。

《第2層》

黒褐色混疊砂層で、厚さが10~15cmのはぼ水平な層である。層に含まれる礁は、千枚岩の細片が多い。本層からは、前期系・後期系の土器と共に、後代のビニール・テープ、ガラス片、磁器片なども出土している。

《第3層》

黒褐色の砂層で、20~75cmの厚さをなす。拡張した東側壁に落ち込みが3つ見られ、東壁に向って弧を描く様に位置していた。前IV期系土器、嘉徳IA式土器、獸魚骨、シャコ貝、夜光貝等が出土した。

《第4層》

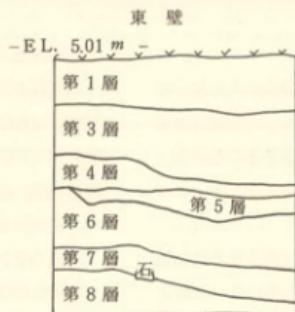
黄褐色砂層で、南東側で厚く（75cm）、北西側で薄い（35cm）。本層は、砂層と疊層が互層をなし、上部の砂層からは、貝殻文土器、面纏東洞式土器が得られたが、第3層からの落ち込みと思われる。疊層からは、シャコ貝、サラサバティ等の海産貝、獸魚骨が得られただけで、人工遺物はみなれなかった。

《第5層》

黒褐色の混疊砂層で、層厚は比較的薄く（7~15cm）、西壁から東壁側へ緩やかな傾斜をなすが、東壁まで及んでいない。本層の礁はすべてサンゴ礁である。遺物は貝殻文土器、沈線文の奄美系土器、獸魚骨、海産貝等が得られた。

《第6層》

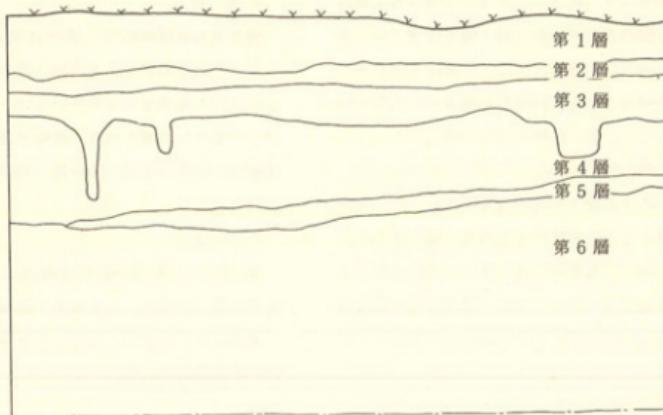
黄褐色の砂層と灰褐色の砂層が互層をなす層である。地表下、2.8mまで発掘したが人工遺物はなく海産貝と河原石のみ得られた。いわゆる地山である。



A - 105 グリッド

- E.L. 5.70 m -

南 壁 | 西 壁



|
ケ-97 グリッド

0 ————— 1m

第 3 図 土 層 壁 面 図

2. 遺構

今回検出されたのは住居址で、A・ア-90・91グリッドにおいて1基（第1号住居址）、エ・オ-94・95グリッドでは2基（第2号・第3号住居址）の計3基が確認された。ただし、第2号・第3号住居址については発掘を完全に終えてないため、プランや性格等の詳細は不明であるが、今回の調査で判明したことについて簡単に述べる。

（1）第1号住居址

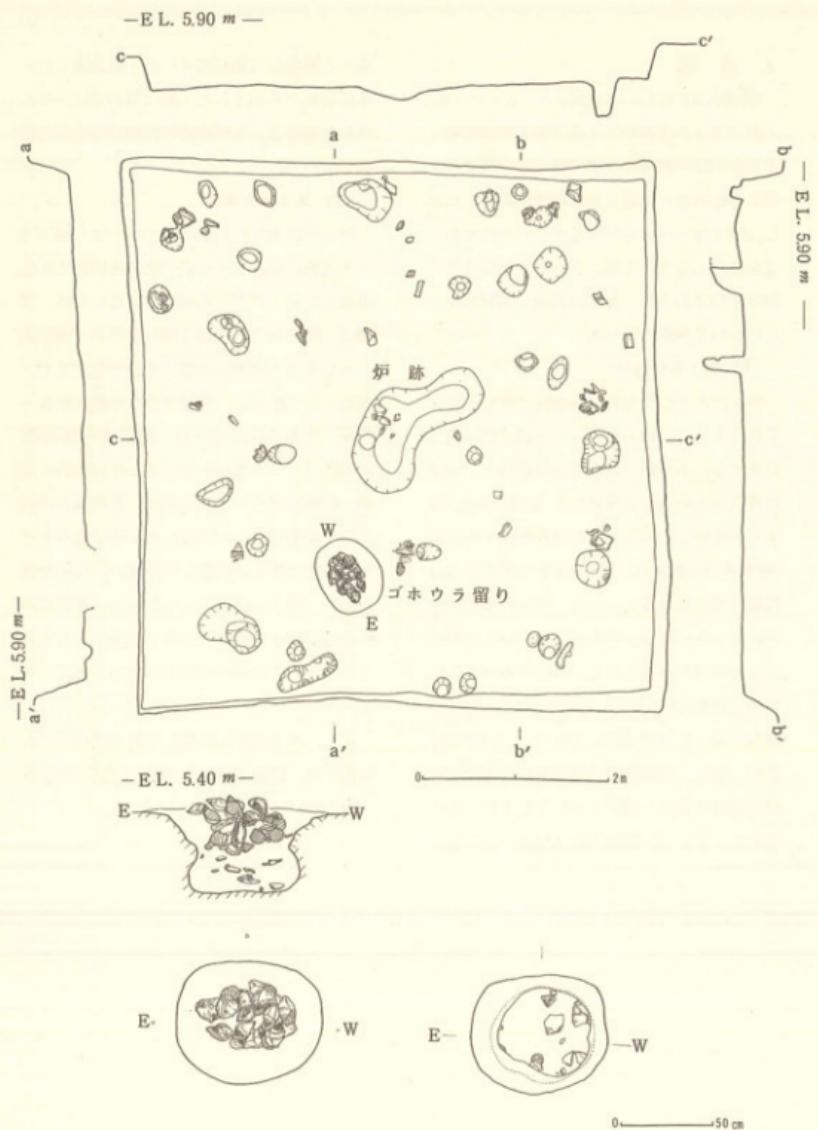
第4図に示したもので平地式住居址と考えられ、A・ア-90・91グリッドのほぼ中央に位置する。平面形は径約6mの椭円で、中央には長径160cm、短径40cm、最深20cmの不定形な炉跡がある。落ち込みは大・小含め30基確認されたが、プランを示す落ち込みは12基と考えられることから、12基は本住居址の柱穴とみられる。残り18基については今後、さらに検討が必要である。落ち込みは大きいもので径60cm、小さいもので径16cmあり、深さは深いもので50cm、浅いもので10cmである。また、住居址内の南東部には径80×65cmの椭円で袋状の目だまりが発見され、その中からゴホウラが21点（有孔12点、孔なし9

点）と黒曜石（第10図4）が1点出土した。本住居址から出土した土器は第13図1～6に示したもので、九州縄文時代晚期の土器に類似している。

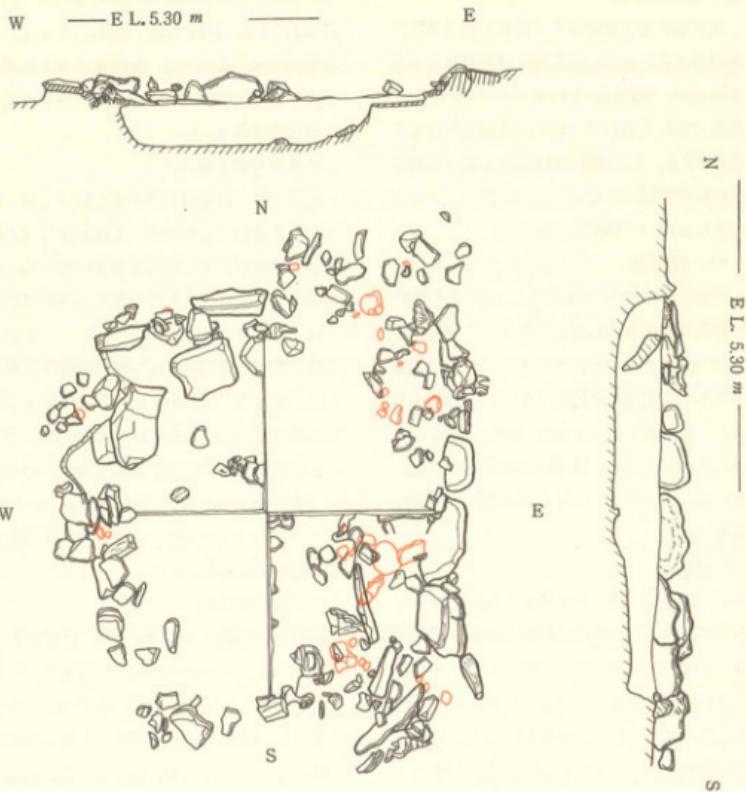
（2）第2号住居址

第5図に示したものはエ・オ-94・95グリッド西側に位置する石組の竪穴住居址である。前述したように未だ完掘していないため、詳細は不明である。平面は隅丸方形で、径は約2mを測る。周囲に大型の千枚岩を立てて、根石として配列し、隙間は小さな礫（径5～10cm）で埋められている。根石は一部内側に倒れ、プランを崩している。住居址内を東西・南北のラインで割り付け、北西部と南西部の2ヶ所を20～25cmレベルまで掘り下げたが、まだ床面には達していない。今回の調査では、柱穴は確認できなかった。住居址内からは前IV期後半に属する土器が出土していることから、ほぼその時期のものと考えられる。

また、本住居址に南接して第3号住居址も検出され、住居址内からはほぼ完形の土器（第12図2）が出土している。



第4図 第1号住居址平面図・断面図及びゴホウラ留り平面図、断面見通し図



第5図 第2号住居址平面図・断面見通し図

3. 出土遺物

本貝塚の出土遺物は人工遺物と自然遺物に大別できる。後者には貝殻や獸魚骨なども含まれるが、未だ同定を行なっていないため、本文では人工遺物についてのみ報告を行なうこととする。人工遺物には土器・石器・貝製品のほか骨製品も少量得られた。以下、それらのものについて簡単に述べる。

(1) 貝製品

貝製品は総数41点得られた。そのうち種類の判明できるものは貝符(1点)、垂飾品(1点)、貝輪(15点)、ビード(3点)、貝匙(3点)、尖頭器状製品(1点)、貝錘(1点)、有孔ホラ貝(1点)、有孔ゴホウラ(12点)の9種38点で、貝輪が比較的多く出土している。ここでは、それらの1部について略述する。

《貝符》

第6図1は、貝の体層部を正方形に切り取り、加工を施した完形の資料である。表面に「R」字状の文様を彫刻し、四隅に径2mm前後の孔を両面より穿っている。しかし、全体的に風化と石灰分の付着が著しいため、文様は不鮮明である。そのため、研磨痕は側縁の一部に認められるだけである。本資料は、道東側の採砂地より表採されたものである。四隅有孔の貝符は沖縄県では未だ報告を聞いていない。長さ28mm、幅28mm、厚さ4mm、重さは5.35gである。

《ビード》

同図2と3は、イモガイ科の螺頭に穿孔した製品で、いわゆるビードと呼称されているものである。両製品とも全体的に水磨を受けており、孔部、切り取り部とも丸く磨耗している。3は切断した後、穿孔及び研磨を施し

ているが、2には研磨痕は認められない。2は殻長13mm、孔径2mm、重量0.78gで、3は殻長12mm、孔径4mm、重量0.25gである。2点ともオ-94グリッド第2層0~10cmレベルの出土である。

《夜光貝製垂飾品》

同図4は、夜光貝の殻を切り取って加工を施したと思われるもので、平面形はほぼ方形状を呈するが、上方では弧を描いている。両側縁には、左右ほぼ対称の2対の抉りが認められ、下方は平坦に成形されている。また、上位の中央には径約5mmの精巧な孔を両面より穿っており、孔を中心にして左右対称をなす。研磨は表面と側面に施されており、特に表面は、真珠層に達するほど丁寧である。縦4.7cm、横4cm、厚さ2mm、重量6.7g。エ-94・95グリッド第2層0~10cmレベルの第2号住居址内の出土である。

《尖頭器状製品》

同図5は先端の1部を欠くが、ほぼ完形の資料である。平面形は有舌尖頭器状で、滑らかな肩をつくりだしている。研磨は側縁の一部を残し、全面丁寧で両側縁は多角的方向から磨いている。縦57mm、幅10mm、厚さ3mm、重量2.2gである。この種の製品は、骨製のものが多く、本標品のように貝製のものはあまり類例がない。仲泊遺跡(註1)でイモガイの体層部を利用したものが1点報告されているだけである。エ-94・95グリッド第2号住居址内の出土である。

《貝錘》

同図6は、シャコ貝の殻頂部を穿孔した製品である。孔径の大きさは、短径15mm、長径28mmの不整形の椭円形である。孔は内側から穿たれたと思われ、殻頂部外表には穿孔の

際にできた小さな荒い剥離痕を残す比較的粗雑なつくりである。研磨は施されてなく、外表殻は水磨を受けて、大部分の放射肋が磨滅している。また、外縁部も同様に角がとれて、丸味を帯びている。現存殻長 8.2 mm, 殻高 57 mm, 重量は 57.5 g で、A-91 グリッドの第 2 層 0~10cm レベルより出土している。

《貝輪》

第 7 図 1 はツタノハガイ科製貝輪で、外縁部を残し殻頂部を大きく環状に除去したものである。内縁は打削調整のみで、研磨は施されてない。外縁はほとんど自然の状態であるが、一部（図の上方）打欠痕が残っている。表面では一部に入念な研磨を施しているが、残りの部分はほとんど研磨されてなく、自然面のままである。孔は短径 4.4 cm, 長径 6.2 cm の橢円形を呈している。現存の殻長 8.2 cm, 殻高 1 cm, 重量は 27 g である。A-105 グリッド第 6 層 0~10cm レベルより出土したものである。

同図 2 もツタノハガイ科製貝輪の破損品で、半円状になっている。表面と内縁及び外縁には研磨が施され、一部には抉りも認められ、研磨はそこまで及んでいる。外縁の研磨は内縁に比べると粗雑である。外表殻の放射肋は研磨のため磨滅している。A-99 グリッド第 3 層 0~10cm レベルの出土である。

同図 3 は、ソデガイ科を使用した貝輪である。研磨は全体的に入念で、つくりは精巧である。平面形はほぼ円状を呈するが、一部には直線的な箇所もある。裏面の外縁には螺階もみられるが、研磨を施している。外縁は平坦で研磨は入念である。現存の長さは約 8 cm, 幅 7.8 cm, 重量 22.5 g で A-99 グリッド第 3 層の出土である。

同図 4 も、ソデガイ科の貝を用いた貝輪と思われるものである。本標品は、螺腹面を利用したもので、腹部中央に「0」字状の粗孔を穿っている。外縁は、結節と螺層を含む螺腹面を打ち欠いて切り取ったままで、研磨はどこにも認められない。それからすると、未完成品と思われる。内縁の長径 4.9 cm, 短径 4 cm。現存の長さは 8.2 cm, 幅 7.5 cm, 重量 73.2 g で、A-99 グリッド第 3 層の出土である。

同図 5 も前記 4 と同じ部分を利用したもので、ソデガイ科の腹面部輪の未完成品と考えられる。本標品は孔を穿つさいに内唇部が欠損したため放置し、その後水磨を受けたものと思われる。重量 95.25 g で、A-100 グリッド第 1 層の出土である。

同図 6 は巻貝の体唇部を水平に切り取ったもので、破損品である。上方は研磨して厚さを半減したあと打ち欠き、下方は自然の薄い箇所を打ち欠きだけで切り取っている。外周には一部に研磨が認められる。現存の長径は約 6.8 cm, 厚さは約 3.8 cm, 重量 58 g である。本標品はイモ貝の横切り貝輪に属するものである。A-100 グリッド第 1 層 0~10cm レベルの出土である。

《有孔ゴホウラ》

第 8 図 1 は A-90 グリッド第 1 号住居址のゴホウラ溜りから出土した 21 点のゴホウラ（有孔 12 点、無孔 9 点）のうち、1 点を図示したものである。本標品はゴホウラの前溝付近の螺背面に径 1.5 cm 前後の粗雑な孔が認められるだけで、他はほぼ自然のままである。他の有孔ゴホウラも同じで、本標品に類似するものは、表面採集でも数点得られている。

（註）

1. 沖縄県恩納村教育委員会「仲泊遺跡・

1977年3月

(2) 骨製品

骨製品は今回の調査で2点得られた。

第8図2は、上下両端を欠く破損品で、原形の大きさは不明であるが、残存形態からして骨錐と思われる。長軸にそって弧状に彎曲した側面に浅い抉りが認められる。現存長8cm、幅1.4cm、厚さ1cm、重量7.26gで、95トレンチの第2層0~10cmレベルの出土である。

同図3は、上端に浅い溝を周囲させ、溝の最も深い部分、つまり最も厚味のない部分で破損しているものである。また、長軸にそって弧状に彎曲した下端部も破損しているため、用途は不明である。現存長9.6cm、幅1.9cm、厚さ1.1cm、重量17.65gで、ア-91グリッドの第2層0~10cmレベルの出土である。

(3) 石器

石器は破片も含めて66点得られた。そのうち用途の判別できるものは、くぼみ石(3点)、すり石(6点)、石斧(23点)の3種32点である。他の34点は破損が著しく、判別が困難であるため、器種不明として扱った。特筆すべきものとして、黒曜石の剥片1点(第10図4)が、第1号住居址内の貝だまりの中から発見されている。ここでは、それらのものうち石斧の1部と黒曜石の剥片についてのみ報告する。

石斧は、23点のうち製作技法から、打製(8点)、刃部磨製(1点)、磨製(14点)に大別し、そのうち打製(2点)、刃部磨製(1点)、磨製(3点)を図示した。以下、前IV期に属する資料を第9図に、九州縄文時代晚期相当の資料を第10図に示し、記述する。

〈前IV期の資料〉

第9図1は打製石斧で、全面に調整剥離を施しているが、基端と刃部の一部に自然面を残す部分もある。表裏面とも大きな剥離で整形し、両側縁は小さな打削調整でかたちを整えている。基端から刃部にかけしだいに幅を広げ、最大幅は刃部付近にある。刃部は刃の半分近くを欠損しているが、表面が彎曲していることから片刃に属する資料と思われる。刃面には弧状を描き刃縁へ傾斜する自然面が認められることから、この自然面をうまく利用して刃を作ったものと考えられる。現存長約16.4cm、幅7.1cm、厚さ2.3cm、重量390gで、エ・オー94・95グリッド第2層より出土したものである。

同図2は身の半分を欠損する打製石斧で、調整剥離と敲打調整で整形している。刃部と両側縁は大きく打ち欠いた後、さらに細かい

剥離を施している。敲打調整は一部の自然面を除き、ほぼ全面に施されているが、敲打面は手馴れ様の滑沢を呈する。平面の最大幅は刃部にあって、基端に移行するにつれ減る。横断面は片側がわずかに厚い楕円を呈し、刃は両刃をなすが、潰れて鈍くなっている。刃縁は弧状を呈し、身の左側には敲打によるやや深い抉りも認められる。現存長10.3cm、幅6.6cm、厚さ3cm、重量310gで、オ-94グリッド第1層の出土である。

同図3は、部分磨製の小形石斧で、刃部に最大幅があり、基部にかけて細くなるバチ形の石斧である。横断面はレンズ状を呈するが、左側でやや厚くなっている。研磨は表面のみ入念に施され、他は打ち欠いて調整したままである。その研磨の状況からすると、破損した石器片を再利用したものと思われる。調整剥離は主に裏面の両側縁に認められるが、刃部では表面に集中している。現存長約9.4cm、幅4cm、厚さ1.4cm、重量60gで、エ-オ-94

・95グリッド第2層の出土である。

『九州縄文晩期相当の資料』

第10図1は完形の刃部磨製石斧で、刃部以外は自然面のままである。刃は片刃の両刃で刃縁は直刃を呈する。刃部は両面から研ぎ出している。平面形は長方形を呈し、横断面は方形に近い。縦断面でみると基端から刃部にかけて漸次厚さを減じ、刃部で最も薄くなっている。素材をうまく利用しているものである。長さ12.2cm、幅3.7cm、厚さ1.8cm、重量120gで、A-グリッド第1号住居址より出土したものである。

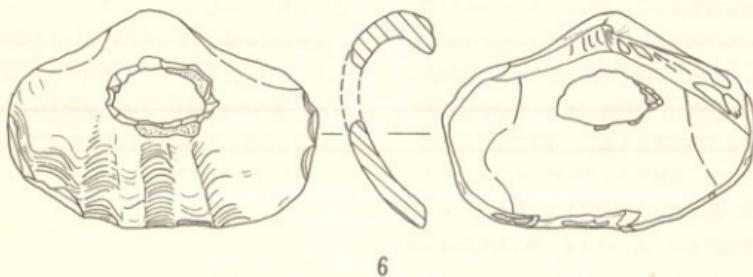
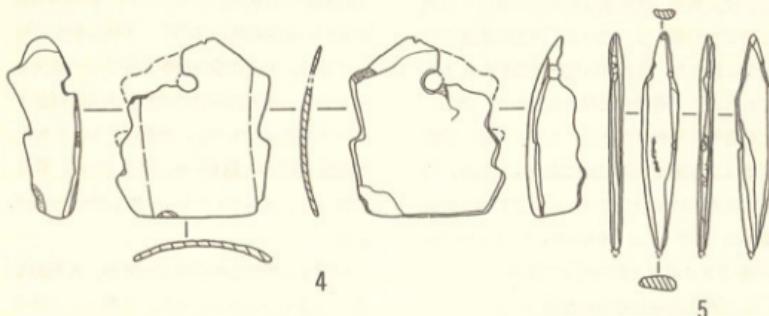
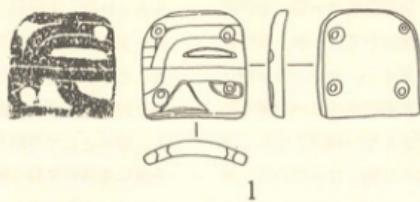
同図2は基端部を欠損する磨製片刃石斧である。全面光沢を有するほど入念な研磨を施しているが、側縁には調整剥離痕を残す箇所

もみられる。平面形は短冊形で、横断面は方形を呈する。刃縁は幾分弧状を呈し、刃こぼれしている部分もある。裏面の刃部には、刃縁に対して直交する線条痕がみられることから、横斧として使用されたものと考えられる。表面は全体的に軽く彎曲するが、裏面は平坦である。現存長7.4cm、幅4.3cm、厚さ1.5cm、重量90gで、A-91グリッド第2層より出土している。

同図3も磨製石斧で、研磨は刃部でとくに入念である。平面形は基部から刃部にかけて幅広くなり、横断面は厚いレンズ状を呈する。刃は両面から研ぎ出しているが、表面の傾斜が強い。裏面の傾斜は弱く、刃面は僅かに張っている。刃部は強い衝撃を受けて一部欠損しており、刃縁の詳細は不明である。同図1の石斧同様素材をうまく利用したものである。現存長13.5cm、幅6.1cm、厚さ3.5cm、重さ390gで、A-90グリッド第1層の出土である。

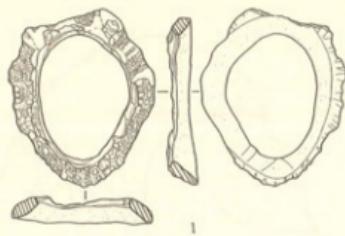
同図4は黒曜石の剥片であるが、人為的な加工は認められない。ただ、当時としては貴重な石材であったことより、有用剥片であることが考えられる。

黒曜石は沖縄において産出しないことから、九州より持ち込まれたものと思われる。長さ3.3cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重量3g、A-90グリッド第1号住居址の貝だまり(貯藏穴)より出土したものである。

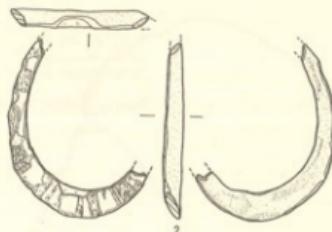


0 —————— 5cm

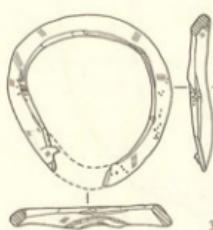
第6図 貝製品実測図



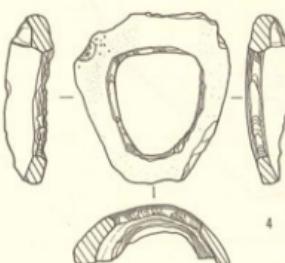
1



2



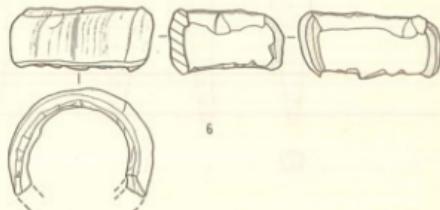
3



4



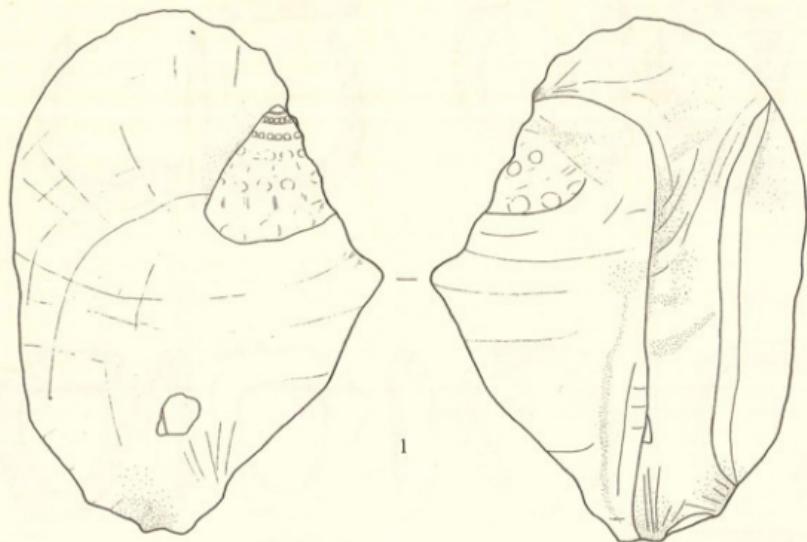
5



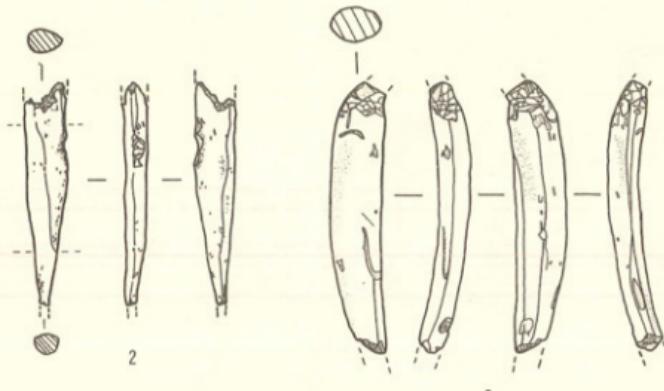
6

0 ————— 5cm

第7図 貝輪実測図



1

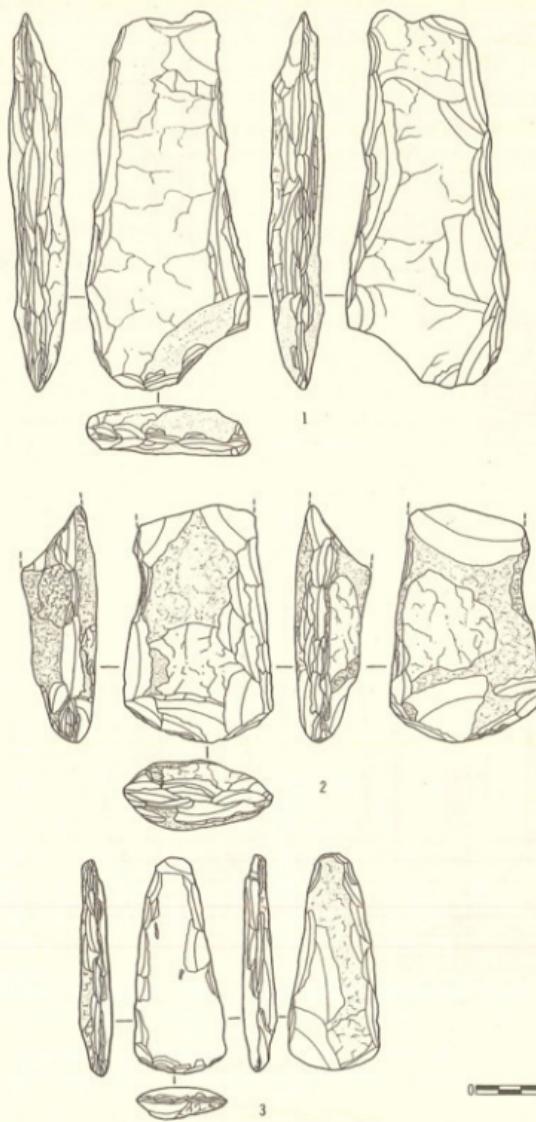


2

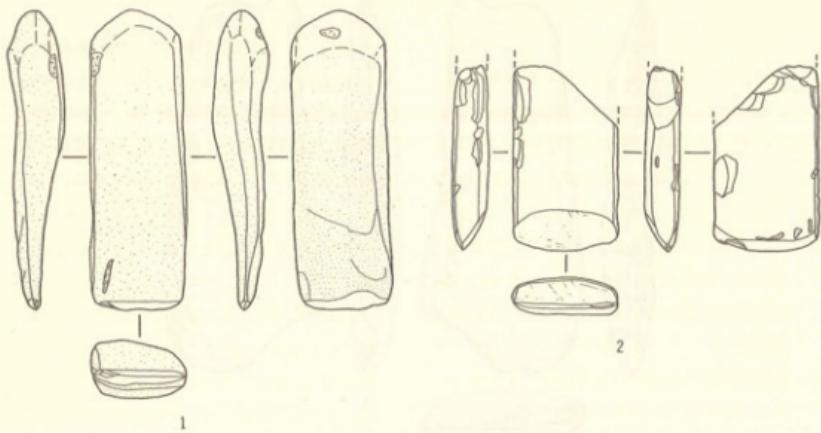
3

0 5 cm

第8図 有孔ゴホウラ及び骨製品実測図

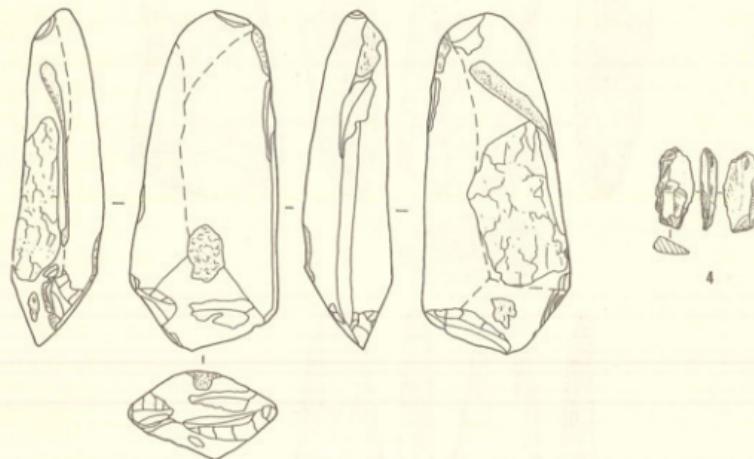


第9図 石斧実測図



1

2



3

4

0 ————— 5cm

第10図 石斧及び黒曜石剥片実測図

(4) 土 器

今回の調査において総数 6199 点の土器片が得られた。そのうち 1 点はほぼ完形で、器形を窺うことができる。その他の土器片は小破片で、完全に復元しうるものはないが、推定復元の可能なものは約 16 点ある。本貝塚より出土した土器は内容も多彩で、前 IV 期の伊波式から後期系の土器まである。また、九州繩文晩期系の土器が出土して話題になった阿波連浦貝塚(註 1) のそれに類似する土器や奄美系土器も前記のものに伴って出土している。これらの詳細は後日報告することにして、本文では、とりあえず特徴的な土器 17 点について簡単に説明する。

《前 IV 期の土器》

第 11 図 1 ~ 4 及び第 12 図 1 ~ 2 に示した 6 点は前 IV 期に属するもので、大山~室川期に相当するものである。第 11 図 1 ~ 4 は口縁部の図上復元を、第 12 図 1 ~ 2 は器形の推定復元を試みた。

第 11 図 1 は径の最大が胴部にある深鉢形と考えられるもので、頸部で縫り、口縁ではわずかに外反する。口唇部はやや丸味を帯びている。口径は推算 19.4 cm で、文様は口縁下約 2.5 cm の箇所に、先端約 4 mm の単範工具を用いて一条の浅い沈線文を施している。器面は撫で調整を施しているが、表面の一部には擦痕が残っている。器色は表裏面とも茶褐色を呈し、石灰質砂粒を混入している。焼成は良好で、第 2 号住居址内の出土である。

同図 2 はカヤウチバンタ式の口縁部破片で、口径は推算 20.4 cm である。器形は深鉢形で、口唇は幅広く(約 1.7 cm)、室川期の特徴(口唇が誇張されること)を有している。文様は肥厚帯に単範工具を用いて、2 条の押し引き

文を左から右の方向に施し、口唇部にも同種の文様を描いている。施文は深く鮮明である。器面は撫で調整を入念に行っているが、外面では一部擦痕も見受けられる。器色は赤褐色を呈し、一部暗褐色を呈する部分もある。テンバーは石英のみで、器厚は約 1 cm あり、焼成は良好である。第 3 号住居址内の出土である。

同図 3 は内傾する口縁破片で、径の最大が胴にある深鉢形である。口径は約 13.2 cm で、口縁部(上段)と胴上部(下段)に、先端の幅が約 4 mm の単範を用いた横捺刻文を上段に 1 条、下段に 2 条施文している。施文方向は左から右で、比較的力強く描いている。中段(頸部)に文様は認められない。下段には横位の凸帯も施しているが、従来の凸帯文とは異なり、カヤウチバンタ式の肥厚帯下段を意識しているように思われる。器面は両面とも撫で調整によって仕上げ、赤褐色を呈する。胎土に石英と少量の千枚質礫片を混入し、焼成は良好である。エ・オー 95 グリッド第 2 層の出土である。

同図 4 も前記 3 のように口縁が内傾するもので、器種は深鉢形に属すると考える。口径推算 11.6 cm で、口唇は幅広く(約 1.5 cm)成形し、そこに先端約 4 mm の単範工具で押し引き文を 1 条左から右に施文している。頸部においても同種の文様を 1 条施し、頸部と口縁の間の空白部には、継位を区画する点刻文が 5 列認められる。撫で調整を両面に施しているが、裏面は粗雑である。色調は表裏とも赤褐色を呈し、混入物として石英を主に含み、焼成は良好である。本標品は口縁形態と文様から推察すると室川式土器と思われる。エ-95 グリッド第 2 層の出土である。

第12図1はやや胴長の深鉢形で、口縁はわずかに外反しており、径の最大は口縁にある。口径推算16.3cm、器高推算は20.5cmである。口縁部は肥厚し、幅広の口唇を成形する。口唇に文様は施されてない。胴上部に断面カマボコ状の凸帯を周囲させ、凸帯と口縁の間（頸部）に押し引き文を2条左から右に単範工具で施している。押し引き文は部分的に横捺刻文になる箇所もある。器面調整は両面とも撫で調整を行っているが、擦痕は消えきってない。器色は内外面とも赤褐色で、石英を主に混入している。オ-94グリッド第2層の出土である。

同図2は、ほぼ完形に近い資料である。砲弾形の深鉢形で、頸部は綺まり、口縁は外反している。口縁部は擬似肥厚を呈し、口唇を幅広く（約1.4cm）成形している。底部は底径約2.6cmの平底である。文様は施されてなく、頸部の1箇所に對の孔を設けている。その孔は焼成以前に穿ったもので、孔の周辺にひび割れも認められないことから補修孔とも異なるようである。器面は両面とも入念な撫で調整を行っており、胎土には石英を混入し、焼成は良好である。口径は約15.5cm。器高は19.8cmで、第3号住居址内の出土である。

《奄美系土器》

第12図3～7に図示した5点がこれに屬し、1点（同図3）については図上復元を試みた。

同図3は、字宿貝塚出土（註2）のものを参考に図上復元を試みたもので、朝顔状に開く平口縁の深鉢形と考えられる。口径は約22.7cmで、文様は肥厚帯に、先端の鋭利な単範を用いて、押し引き文を約6cm単位で羽状に施している。器面調整は外面に擦痕が見受けられるが、内面は入念に撫で消している。表面

は茶褐色または暗褐色で、裏面は赤褐色を呈する。胎土は精選され、石英・金雲母等を混入し、焼成は良好である。本標品は、面繩東洞式土器の範疇ではあるが、典型的なステップ状の文様は施文されていない。ケ-97グリッド第4層より出土したものである。

同図4も面繩東洞式土器に含められるもので、口縁は肥厚し内彎している。文様は肥厚帯に単範を用いた押し引き文を左から右へ2条施している。施文具の先端は平坦で幅は約5mmである。器面調整は両面とも撫で調整を施しているが、擦痕は消えきっていない。器色は表裏面ともに赤褐色を呈し、テンバーとして石英を混入している。ケ-97グリッド第3層の出土である。

同図5は胴部の破片で、斜行する押し引き文とシャープな沈線を交互に施文しており、嘉徳IA式土器に属するものと考えられる。右側中央部には径6～7mmの孔が穿たれている。器面調整は両面とも撫で調整を行っているが、裏面には一部擦痕も見受けられる。器色は茶褐色を呈し、焼成は良く、テンバーとして石英を主に混入している。ケ-97グリッド第3層の出土である。

同図6は口縁破片で、口唇部は舌状をなすが、口唇面は若干平坦になっている。口縁下には貝殻の復縁部を押圧して、約2.5cm単位で横位に施している。器面調整は内外面とも撫で調整を行っているが、内面は粗雑で擦痕が残っている。器色は両面とも赤褐色を呈し、焼成は普通で、テンバーとして石英を混入している。本標品に類似するものは、具志川島遺跡群（註3）・浜屋原貝塚C地点（註4）・浦添貝塚（註5）・東貝塚（註6）などでも検出されている。ケ-97グリッド第3層の出土で

ある。

同図7は平口縁の破片で、文様は単範でシャープな斜沈線を施し、羽状構成をなしている。口唇は平坦に成形され、わずかに外反する。器面は表裏とも撫で調整を行っているが、擦痕は消えきってない。器色は両面とも赤褐色を呈し、焼成は普通で、胎土には石英を含んでいる。表面には若干のススが付着している。本標品は施文手法や文様が從来の沖縄のものとは異なっているため、奄美系に含めた。ケー97グリッド第3層の出土である。

『後期系土期』

第13図1~3は口縁部から胴部にかけ図上復元を試みたもので、それぞれ径の最大が胴部にくる無文の深鉢形が想定される。

同図1は平口縁で最大径は胴下半部にあり、頸部がやや締り、口縁は軽く外反している。器面調整は表裏面とも撫で消しによるが、裏面には擦痕が消えきらず、残っている部分もある。器色は両面とも茶褐色を呈し、胎土に石英と石灰質砂粒を混入する。焼成は普通で、器面はポーラスである。口径は約19.3cm、器厚は約7mmで、A・ア-90・91グリッド第1号住居址内、第8号柱穴より出土したものである。

同図2は從来の沖縄の後期系土器と様相を異にするものである。器形は深鉢形を呈すると思われ、肩部に著しい特徴がみられる。口縁は幾分外反をなし、その下3.5cmのところで肩部をつくりだし、内側に折れ曲がったかたちで底部に至ると思われ、その際、肩部の器表面に陵を有している。すなわち断面が逆「く」の字状をなしている。それらの特徴は、九州繩文時代晩期の土器に類似している。小破片ではあるが、その形状からすると山形口

縁を呈すると思われる。器面は両面とも撫で調整を施しているが、幾分アバタ状を呈している。器色は表面赤褐色、裏面黄褐色で、胎土に石英砂粒を含み、焼成は比較的良好である。口径22cmで、A・ア-90・91グリッド第1号住居址内の出土である。

同図3も2と同様なものであるが、肩部のつくりだしは2ほどではない。平口縁を呈すると思われ、口唇下3cmのところに肩部をつくりだし、器表面は陵を有している。器面は両面とも撫で調整を行っているが、アバタ状を呈している。表面は赤褐色ないし黄褐色、裏面は黄褐色をなし、胎土に石英砂粒を含み、焼成は良好である。口径は約20cmで、A・ア-90・91グリッド第1号住居址より出土している。

同図4も、肩部は欠損しているが、口縁部の傾き具合からすると、前記2・3と同様な器形を呈するものと思われる。口縁は外反し、幾分肥厚しており、両面とも撫で調整によって仕上げられているが、アバタ状を呈している。器色は両面とも赤褐色で、胎土に石英砂粒を含み、焼成は比較的良好である。A・ア-90・91グリッド第1号住居址内の出土である。

同図5は、粘土紐を弧状に貼りつけたいゆる外耳土器である。外耳はそれほど発達しておらず、把手としての機能はなく、装飾的なものと思われる。両面とも撫で調整をしているが、かなりアバタ状を呈している。表裏面とも黄褐色で、石灰質砂粒を含んでいる。A・ア-90・91グリッド第1号住居址より出土したものである。

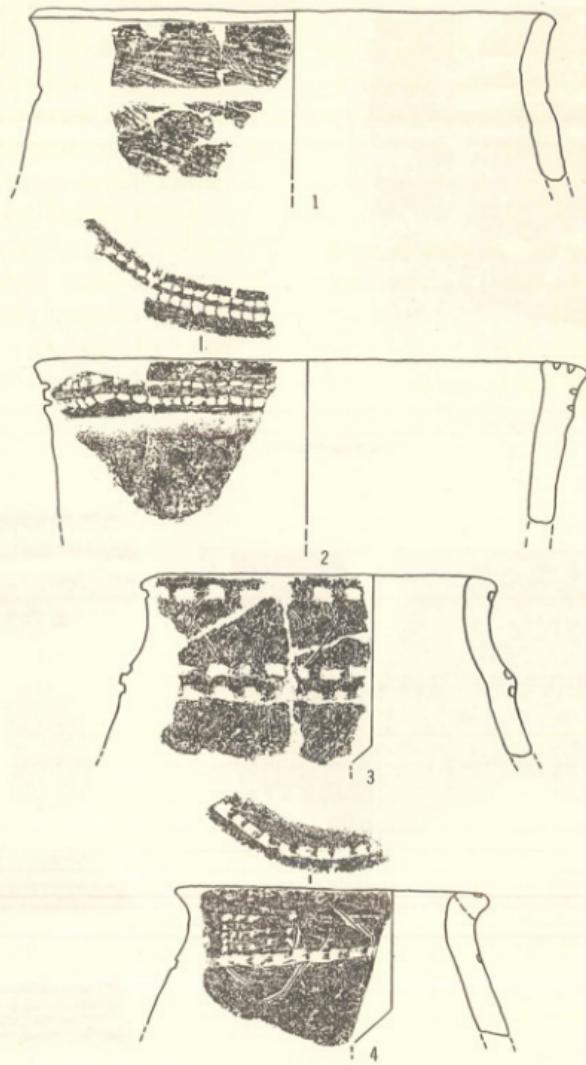
同図6は底部の形状を完全に示す資料で、立ち上がりは幾らか内彎する。底径は約3.5

cmで、底部の厚さは約1.6cmある。混入物は石英を含み、表面は赤褐色、裏面は黄褐色を呈する。焼成は良好である。A-91グリッド第2層の出土である。

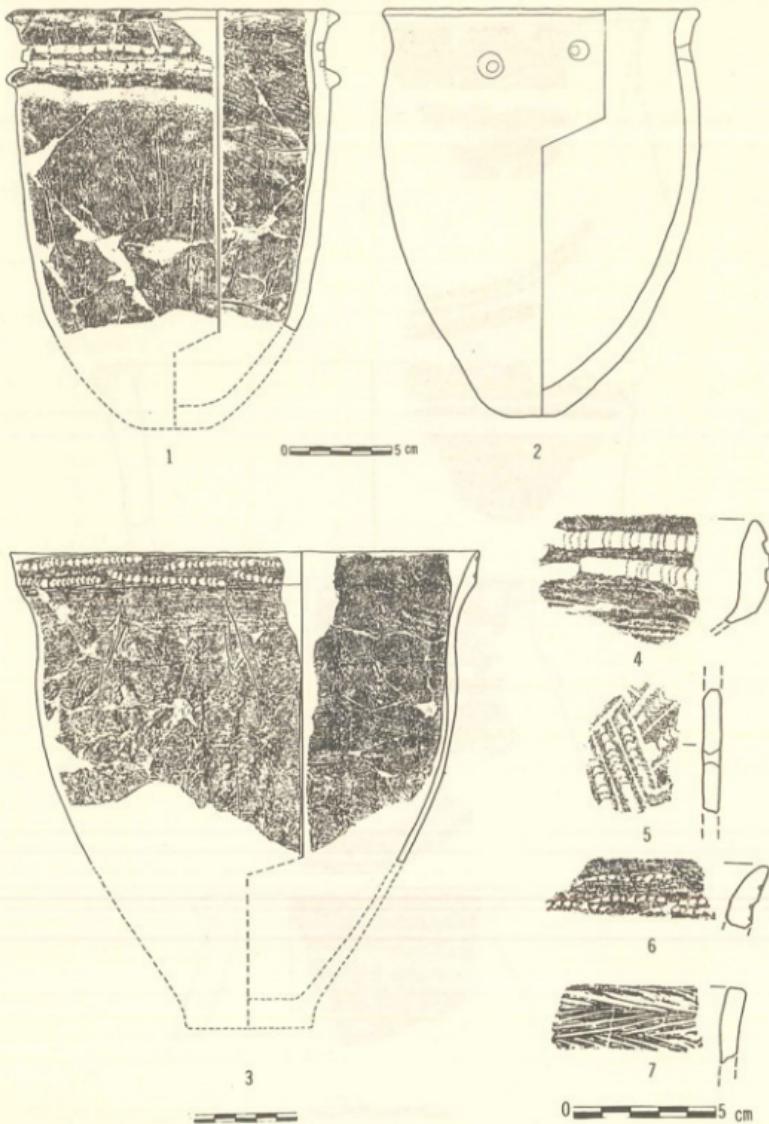
(註)

1. 縄文晩期の土期—渡嘉敷村阿波連浦貝塚で出土—沖縄タイムス(朝刊)1980年6月19日
2. 鹿児島県考古学会「宇宿貝塚」「鹿児島考古」第13号 1979年

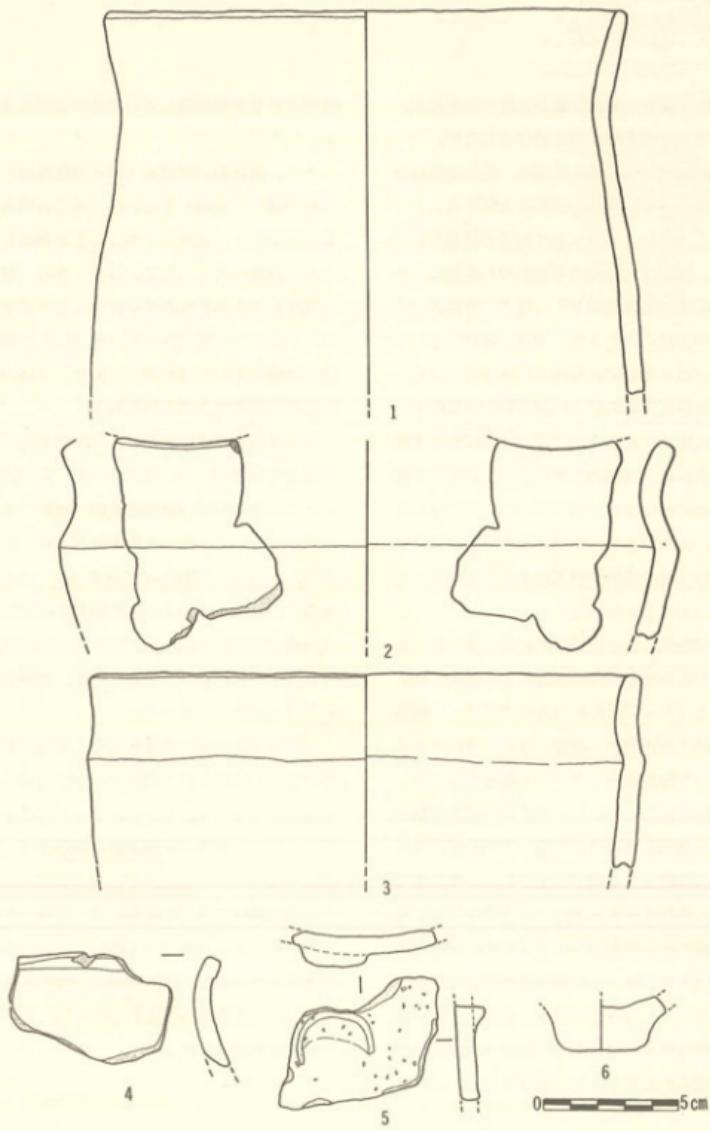
3. 伊是名村教育委員会「第一次発掘調査報告書」「具志川島遺跡群」1977年3月
4. 沖縄国際大学考古学研究会「読谷村浜屋原貝塚第3次発掘調査報告書」「島嶼の考古」一創刊号— 1977年
5. 新田重清「沖縄浦添貝塚出土の市来式土器について」「古代文化」第23巻第9・10号、古代学協会 1971年
6. 渡名喜村教育委員会「東貝塚発掘調査報告」「渡名喜島の遺跡Ⅰ」昭和54年3月



第11図 土器実測図



第12図 土器実測図



第13図 土器実測図

III むすび

以上、調査の成果を簡単に述べてきたが、ここで若干の考察を加え結びとしたい。

60余の島々よりなる沖縄は、島の地質及び地形からみると高島と低島に大別することができる（但し、沖縄本島は両者の要素を有する）。前者は古生代の千枚岩や石灰岩などを基盤とする比較的山がちの島で、沖縄本島北部や西表島に代表され、遺跡は各時代ともほとんど低平な海岸砂丘地に形成されている。後者は新世代第四紀の琉球石灰岩を基盤とする比較的低平な島で、沖縄本島南部や宮古島に代表され、遺跡の立地は石灰岩丘陵上や崖下、海岸砂丘地など場所があまり限定されてない。このように、沖縄における遺跡の立地条件は、島の地形的要因によって大部左右されていることがわかる。

座間味島を含む慶良間列島は高島に属していることより古座間味貝塚もその例にもれず、標高4～5mの海岸砂丘地に立地し、沖縄新石器時代前IV期から後期、グスク時代に至るまでの遺物が地点を異にして散布している。

今回の調査において、前IV期（縄文後期相当）の遺物包含層及び遺構と後期初頭相当の遺物包含層及び遺構が検出された。その中でも特に注目すべきものは、第1号住居址より九州縄文時代晚期相当の土器や同住居址内の貯蔵穴よりゴホウラ21個と黒曜石の剥片と共に出土していることである。そのことは、古座間味貝塚人が何らかの方法で九州産の土器や黒曜石を入手し、その見返り品として南海

産のゴホウラを所持していたものと考えられる。

また、前IV期の住居址（第2号住居址）は日程の都合で完掘していないが、約2m四方の隅丸方形プランと竪穴であることは判明している。砂地につくられていることから、壁の崩壊を防ぐために板石を縁に沿って立てている。このような竪穴住居址の検出は前IV期の砂丘遺跡においては初めてであり、当時の居住形態が把握できると思われる。

出土遺物も多岐にわたり、前IV期相当の包含層より沖縄の伊波、荻堂、大山、室川式土器と共に奄美の面縄東洞式土器、貝殻文土器などが出土している。その他にも石斧、たたき石、貝製品、骨製品などが得られている。さらに、後期初頭相当の包含層より前記した九州縄文晚期相当の土器と共に黒曜石の剥片、孔を有するゴホウラ、貝輪、貝匙、骨製品、石斧などが出土している。

本貝塚の主体部は地味が良く、現在でも耕作地として利用され、地表下40cmまではすべて搅乱されている。しかし、その下にはオリジナルな包含層及び遺構が良く保存されている。

今回の調査は貝塚の範囲確認を目的としたもので、グリッド掘りを余儀なくされたが、前述した成果が得られ、さらに、次年度もひきつづいて実施する予定をしており、より多くの成果が期待される。

図 版



図版 1 古座間味貝塚遠景（矢印・東側より）



図版2 発掘状況



図版 3 上: A-105 グリッド東壁 下: ケ-97 グリッド南壁



図版4 第1号住居址



図版 5 第 2 号 住 居 址



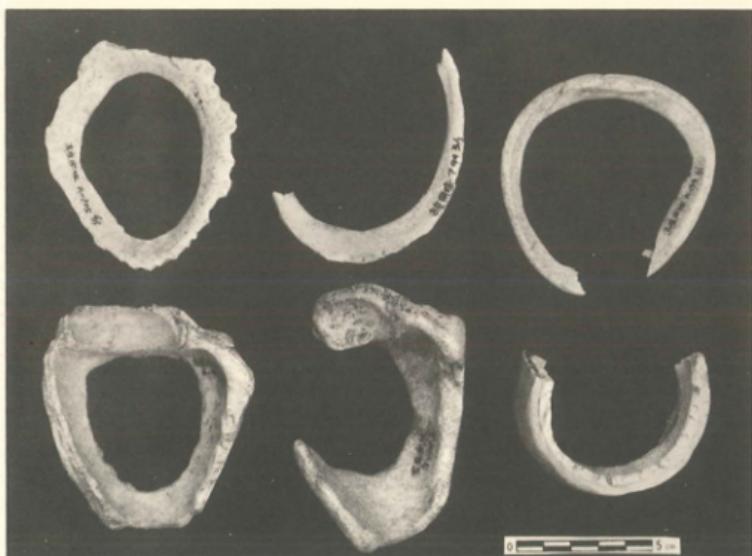
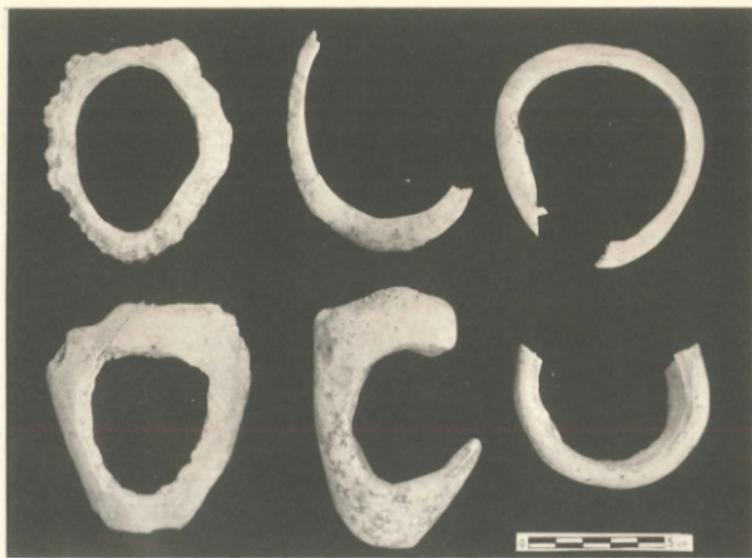
図版 6 上 ゴホウラ出土状況 下 土器出土状況



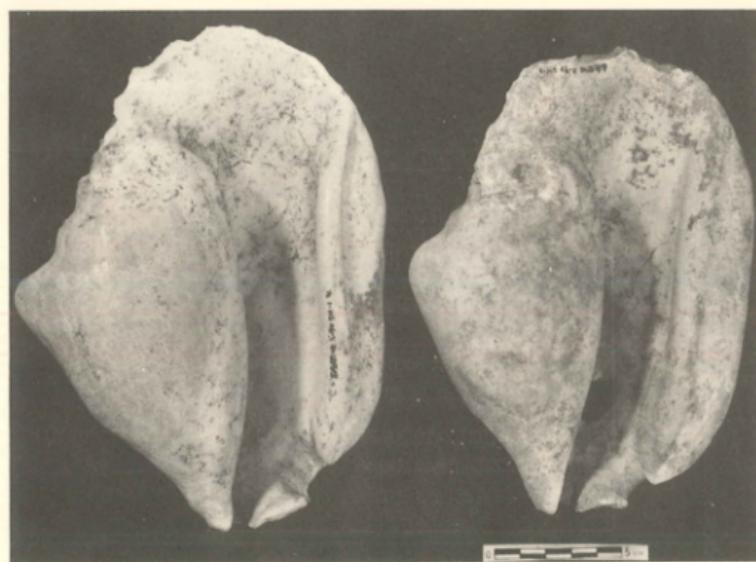
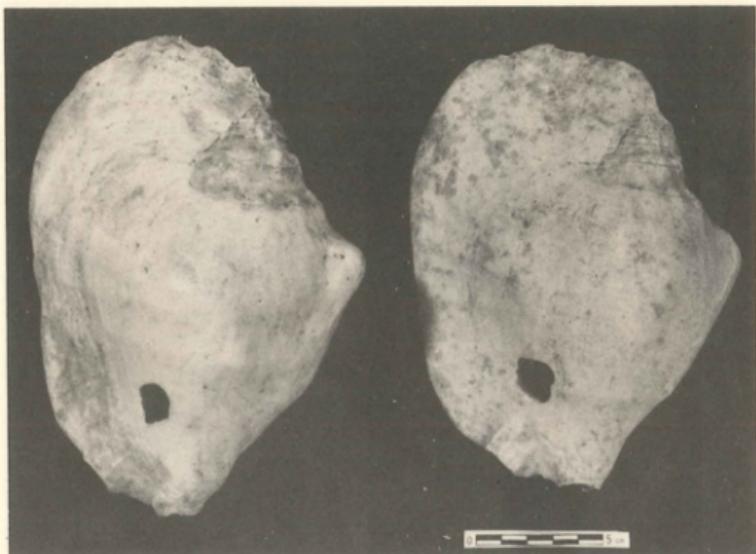
図版7 上：現場説明会 下：調査メンバー



図版 8 貝製品及び骨製品



図版 9 貝 輪



図版 10 有孔ゴホウラ



0 5 cm



0 5 cm

圖版 11 石斧



0 5 cm



0 5 cm

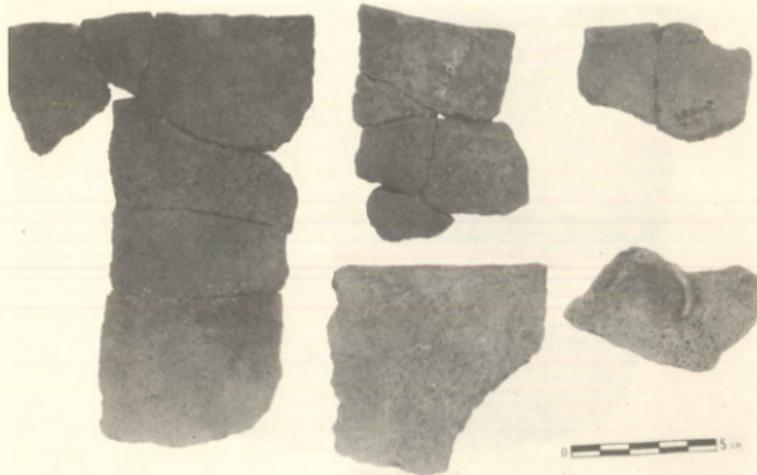
図版 12 石斧



図版 13 土 器



— 5 cm —



— 5 cm —

図版 14 土 器

第三回

沖縄県文化財調査報告書第40集

古座間味貝塚

第1次範囲確認調査概報

編集・発行 昭和56年3月20日

沖縄県教育委員会

印 刷 株式会社 丸正印刷社

沖縄県那覇市国場349-3

T E L 0988-54-8484

Hideko O.

